

意味のない話 佐佐木定綱

大会で幸綱がある歌に対し「この歌はほとんど意味がない」という評をした。

人に言うことでもないがふるさとの祭りのチラシ引出しにあり「チラシをしまっているというだけの歌でしょう。最近は歌の中に意味が多すぎる。こういうほとんど意味がない歌というのも必要なんです」

これを聞いてひとり驚いていた。これだけならばぼくもまあ、そういうもんかなという感じなのだが、今年の初めにほとんど同じようなことを聞いていたのである。場所は角川短歌賞の授賞式。選考委員の島田修三のことばだ。

「おまえの歌はスカスカなんだよな。ことばとことばの間が広い。たとえば『ゲームならゾンビ』が出てくるような角曲がつて現実確かめている」の歌は、角曲がつたというだけだろう。角曲がつて、なんだゾンビなんかいねえじやねえかと言つている。最近は緻密な歌が多くて、ことばとことばの意味が狭すぎる。もちろんそれはそれで重要なんだが、意味のないことを歌うつてのもいいんだ」ぼくも多少醉っていたが、言つている内容は大筋あつている。

意味の問題は昨年、「短歌」四月号で小池光が服部真里子の「水

仙と盜聴、わたしが傾くとわたしを巡るわずかなる水」の歌をわからないと言い、その読みを巡って話題になつたことも通じる。意味が通るか通らないかが争点のひとつであり、この歌と批評を巡つて歌壇が盛り上がつた。

人生に意味があるのか。生きていることの価値とは。なんてことを考え出すと終わりは見えないが、現代では意味のあるものが価値のあることとイコールになつてゐるようだ。

ならば歌も価値がある方がいい、意味がある方がいい、と思うのが普通だろう。「おまえの歌には意味がない。つまり価値がない」なんてこと言われたら！だから意味のある作品を作る。それも内容が簡単だと価値が少ないので、できるだけ意味の多い作品を。

その意味性といふものは「自己」とか「個性」ということばと結びついていくように思う。意味のない歌とは共通性のある歌。誰にでもわかること、まあ、そんなもんんだろうという歌である。自己の確立とか個性尊重と言われるようになり、その人なりの意味、みたいなものが問われるようになつてきた。個人が感じる意味を伝えるのは難しい。内容が複雑になるのも当たり前である。

今年の角川「短歌」一月号に「わたしの考える良い歌とは」という特集がある。たとえば、高野公彦は「内容が単純」「意味が明瞭」「愛誦性がある」とする。

自分の作品がどれぐらい意味を含んでいるのか、という観点から見直して見るのもいいのかもしれない。自分がどれほど意味のある歌を作つているのか、意味のない歌を作つているのか。それを知ることに意味があるかどうかは置いておいて……。